

2024年12月22日（日） 宮崎中部教会・クリスマス礼拝

説教 「ノエルー喜びたたえよう」

ルカによる福音書2章1～20節

今日わたしたちは、主イエス・キリストがお生まれになったクリスマスを覚えて、共に礼拝をお献げしています。聖書に記されている最初のクリスマス、それもまさに礼拝そのものと言ってよい出来事でした。そして、マリアとヨセフの身に起こった出来事も、その最初の礼拝が行われるために欠くことの出来ないことばかりでした。先ほど読まれた『ルカによる福音書』は、結婚する前のマリアの視点でクリスマスの出来事を記していますが、今日読まれなかった『マタイによる福音書』は、夫となるヨセフの視点で記されています。マリアだけでなくヨセフの視点も合わせて知ることによってクリスマスの出来事をより立体的に思い描けるようになると思いますので、今から少しマタイの方に記されている内容に触れてまいりたいと思います。

マリアと婚約していたヨセフは、婚前に彼女が身ごもったことを知り、このことが表沙汰にならないよう密かに彼女と縁を切ろうとしました。既に結婚していたならば、こんなにおめでたい知らせはなかったはずですが、しかし、今から二千年前のユダヤでのことです。結婚の約束を交わしたに過ぎない二人は、まだ一度も一緒に生活をしたことがありませんでした。つまり、そのような時期に婚約者マリアが妊娠したということは、ヨセフ以外の相手との不貞行為によるものと見なされ、ユダヤの律法はそのような行為を働いた女性を石打ちによって死刑にすると厳しく定めていたのです。

このことで大いに思い悩んでいた時、ヨセフの夢に天使が現れ、「ダビデの子ヨセフ、恐れず妻マリアを迎え入れなさい。マリアの胎の子は聖霊によって宿ったのである。マリアは男の子を産む。その子をイエスと名付けなさい。この子は自分の民を罪から救うからである」（マタイ1：20b）と告げました。「ダビデの子」、すなわち実質的な初代イスラエルの王であり、この国に栄華を極める時代をもたらしたダビデ王の血をひく、ダビデの家系に連なる者。ヨセフに対してこのように呼びかける天使の御告げは、ヨセフが生まれるよりはるか

昔、ヨセフの何十代も前の先祖の時代から、神の御計画が着々と進められていたことを示す、神の天使にしか語ることの出来ない言葉でした。それゆえ、この御告げを聞いたヨセフは、人間の常識を超えた神さまの御計画というものに想いを馳せ、その御計画に従って自分に与えられた道、すなわち天使の御告げ通りにマリアを妻として迎え、二人に与えられた子どもを守り育てていく道を選び取る決心が与えられたのです。

さて、今日読まれた『ルカによる福音書』は、同じ頃ユダヤの人々に対して理不尽としか言えない住民登録の命令が下されたことを伝えています。当時、ユダヤはローマ帝国の領土としてその支配下に置かれていましたが、初代ローマ皇帝であるアウグストゥスは、広大なローマ帝国の全領土にどれくらいの人々が住んでおり、地域別の人口分布はどうなっているかといったことを出来るだけ正確に把握しようとしていました。その目的は、調査に基づいて領土内の全住民に対して人頭税を課し、潤った財政によって軍事力を高め、その力にものを言わせて支配地域を一層拡大することでした。そのため、《人々は皆、(住民)登録する(だけの)ためにおのおの自分の町(故郷)へと旅立》つことを余儀なくされたのです。《ヨセフもダビデの家に属し、その血筋であったので、ガリラヤの町ナザレから、ユダヤのベツレヘムというダビデの町へ上って行》くこととなりました。

ナザレからベツレヘムまでは直線距離にして160キロほどあり、その間数百メートルもの高低差が繰り返される大変険しい道のりです。

二人がどれくらい時間をかけて旅をしたか聖書には記されていませんが、グーグルマップで調べてみると徒歩で33時間かかると出てきます。人間は、普通の状態でも33時間ぶっ通しで歩くことは不可能でしょう。ましてやお腹の大きかったマリアには、休み休みでなければ旅など出来なかったわけですから、少なくとも三泊は野宿を強いられたことが推測されます。そんなこんなで、マリアとヨセフはようやくベツレヘムに辿り着きましたが、長く厳しい旅を続けてへトへトになっているというのに、彼らは休息する場所を得ることが出来ませんでした。同じように住民登録をするため、各地から旅してやって来た人々が我先にと宿

の部屋を確保していたからでした。マリアは一刻も早く柔らかな敷物が敷かれた暖かい部屋で休みたかったことでしょう。しかし、探しても探しても宿の空き部屋は見つからず、そうこうしている間にマリアは出産の時を迎えてしまいます。

この時のヨセフはどんな思いだったでしょう。天使の御告げを受け止め、自分がマリアと生まれてくる子どもを何としても守ると決心したばかりなのに、その子どもが安全に生まれてくる場所さえ確保することが出来ません。ヨセフが悲壮感を漂わせながら空き部屋探しに奔走している姿が思い浮かびます。しかし、ヨセフの必死な思いも実らぬまま、マリアの陣痛が始まってしまうのです。

彼らは、やむにやまれず家畜を飼育するための小屋に駆け込み、マリアはそこで赤ちゃんを出産しました。人間として普通に休むべき場所は、この時のマリアとヨセフにはありませんでした。ゆっくり落ち着けるところか、家畜の鳴き声が響き、糞尿の臭いが垂れ込めるような、とても清潔とは言えない場所での出産でした。そして、本来家畜の餌を入れる「飼い葉桶」が、二人に与えられた赤ちゃんの最初に与えられた場所となりました。このように、決して幸せではない、いやむしろ不幸としか思えない状況の中で、イエス・キリストはこの世における誕生の時を迎えられたのでした。

わたしたちは、クリスマスを喜び祝います。しかし、喜び祝う事柄はキリストの誕生についてだけではありません。神の御子がこの世に来てくださったのは、死をもって死を滅ぼすべく、十字架にかかってくださるために他なりません。神は、すべての人間を暗闇の中から救い出すため、御子イエス・キリストの命という計り知ることの出来ない大きな代償を払ってくださいました。言うなれば、キリストは十字架におかかりになるためこの世でお生まれになったのです。この出来事によってすべての人が暗闇の中から救い出された、クリスマスはそのことを喜び祝う時です。

イエス・キリストは、母マリアの胎内にいた時から厳しい旅路を歩まれ、休むところも得られない人たちと共に自らさまよう人となり、本来人間として過ごすべき場所も与えられず、その誕生の第一日目を迎えられました。わたしたちは、この世にあって様々な経験をします。この世における歩みはそれぞれに辛く厳しい道のりでもあります。しかし、そのようなわたしたちに先んじて、イエス・キリストは苦しみのすべてを経験してくださいました。そして、一人ひとりの人間が味わう苦しみの、その味を具体的に知る御方として、すべての人間をその苦しみの闇から救い出し、神の平安によって満たされた光の中を歩む者とするため、十字架というこの上ない苦しみを受け、神の独り子としての命を捧げてくださいました。

「恐れるな。わたしは、民全体に与えられる大きな喜びを告げる。今日ダビデの町で、あなたがたのために救い主がお生まれになった。この方こそ主メシアである。あなたがたは、布にくるまって飼葉桶の中に寝ている乳飲み子を見つけるであろう。これがあなたがたへのしるしである」(2:10~12)。クリスマスとは、このような救い主としてイエス・キリストが、わたしたち一人ひとりのために来てくださった時です。感謝してお祈りをささげます。